

みのわ未来委員会（第3回）会議要録

日 時：平成27年6月18日（木）13時～15時20分

会 場：箕輪町役場 3階 講堂

参 加 者：みのわ未来委員会委員（有賀委員・高田委員：欠席）

町長・副町長・事務局（企画振興課）

傍聴人数：なし

報道機関：みのわ新聞・伊那ケーブルテレビ

1. 開会

2. 会長挨拶

今回は、基本構想（案）についての議論。根拠となる「人口についての考え方」と、「暮らしやすさとは何か」について定義をはっきりさせ、専門部会につなげていきたい。本日の会議で本会としての決定までいきたい。

3. 説明・報告事項

（1）みのわ未来委員会の役割について（資料1）

※資料をもとに事務局より説明

（2）専門部会の検討状況について（資料2）

※資料をもとに事務局より説明

4. 議事

※事務局より前回の議事内容を報告。第2回議事録を公表することを承諾。

（1）第5次振興計画の基本構想（案）について（資料3）

※資料をもとに事務局より説明

【基本構想案】

「みんなで創る、未来につなぐ、暮らしやすい箕輪町

～人口減少する未来への挑戦・箕輪チャレンジ～

唐澤委員)

○「今までと同じようなまちづくり」ではなくて、あるべき姿と現状のギャップを踏ま

え、「厳しい時代に合ったまちづくり」とか、「箕輪独自のまちづくり」といった、やる気を出す言葉にしてほしい。

浦野会長)

○「人口についての考え方」と、「暮らしやすさとは何か」を議論するが、まずは「人口についての考え方」から議論する。

事務局からは、人口が減少するという推計と、「箕輪チャレンジ」により減少を少し抑制した推計が示されている。これで良いか。「もっと増やす」「維持する」「減ることはやむを得ないがこれぐらいには抑えたい」「そのままいく」といった考え方があると思う。人口の目標数（見込み）をどれくらいにするか。

小池委員)

○日本全体での人口減少が進むことは大枠ではやむを得ない。ただし、箕輪町としては、箕輪チャレンジを強固に推進し、人口の確保するという点で良いのではないか。これは地方自治体間の競争の問題である。若年層の割合で南箕輪村が県内トップだった。中学3年生までの医療費の無料化、上伊那最低の保育料、大学進学への奨励金など打ち出している。箕輪町でも、この上をいく取り組みを計画していったらどうか。

浦野会長)

○今、具体的に例示された様な施策は、とても金がかかる。箕輪町の子どもの学力や体力は、上伊那の中でレベルが高いという評価を踏まえ、比較的成本をかけなくても、教育の観点から、箕輪町で子どもを育てたいと思ってもらえるような施策が良いのではないか。

唐澤委員)

○そもそも、具体的な施策を専門部会で作り、積み上げた目標人口にしないと、何の根拠もない目標値を示してもダメなのでは。今日人口を決めるのではなく、逆の進め方でも良いのではないか。

山本委員)

○賛成。具体的な施策や中身が見えない中で設定するのは難しいと思う。

また、人口減は避けられないのかも知れないけれども、人口減を前提とする目標よりも、維持を目標とした方が良いのではないか。

柴委員)

○賛成。人口減少を前提にした基本構想はいかかなものかと思う。若い世代は、将来的

に人口減少が目に見えているような町なら離れていく人が多いと思う。基本構想としては、人口の維持や減少を見込むのではなく、増加を目標として考え、施策を立てていきたい。

浦野会長)

- 「人口減少社会への挑戦」という言葉には、捉え方によってはネガティブに捉えられる。もう少し分かりやすい内容にし、また、暮らしやすい町にするのなら人口は減らないといったポジティブなイメージも見せてくれた方が良いのかもしれない。

金沢委員)

- 人口減少が進むことは本当に悪いことなのか。フィンランドは日本と同じ国土面積で、人口が20分の1でも豊かに暮らしている。本当の豊かさとは人口増加だけがもたらすわけではなく、むしろ人口増が止まった時こそ、文化などが発達すると聞いている。人口にこだわると、本当の豊かさが見えなくなることもある。もうちょっとポジティブに何かを見つけていく必要があるのではないか。

和田委員)

- 人口が減少に転じ、急な増加が見込めない状況では、人口が減ることを前提に世の中や自分たちを変えていく方が重要になってくるのではないかと思う。

・関連して事務局に質問。資料3で、「箕輪チャレンジ型推計」は町の「暮らしやすさを確保」してUターン率と合計特殊出生率を上げることにより達成するとあるが、「町の暮らしやすさを確保する」とは何か。今の暮らしやすさを維持することなのか、暮らしやすさをもっと追求して向上させていく話なのか、わからない。

→「暮らしやすさの確保」とは、現状を維持する面と、挑戦して向上させる面の双方を含んでいる。この「箕輪チャレンジ型推計」では、20歳～34歳の方々のUターン率の向上と、出生率の向上を目的に考えているため、例えば・・・

「自然環境」・・・維持	「支えあう地域福祉社会」・・・需要の増加に対応して拡大
「安全安心」・・・維持	「子育てに適したまち」・・・合計特殊出生率向上
「協働」・・・維持	「働く場」・・・昼夜間人口比率維持
「医療体制」・・・維持	「都市整備」・・・維持

和田委員)

- 維持だけではUターン率15%上昇は達成できない。向上させる面も含むのであれば、「確保」というあいまいな言葉を使わず、「まちの暮らしやすさをより高める」といった明確な示し方をした方が良い。消極的な印象を受けられないように。

吉村委員)

○日本全体の人口が減っていくのは仕方ないが、箕輪町は減らさない方向にするのか、あるいは増やしていくのか、維持するのか、ここは本当に議論のしどころだと思う。唐澤委員からは、各部会の施策の積み上げがあつての目標人口だという発言があつたが、本会の強い意志で構想を打ち出していくという考え方もあると思う。

小島委員)

○Uターンしてきた人がどうしてUターンしてきたのか、Iターンはなぜか、そういった話を聞いたらどうか。

高橋委員)

○自分の場合は、新規就農を検討する中で、県の就農補助制度や、研修制度が充実していたこと、また、里親研修、就農地のコーディネートまで力を入れてやってくれているので長野県を選び、箕輪町を紹介してもらってIターンを決めた。最初は、箕輪町のことを知らなかったし、不安だったが、来てみれば人の言葉遣いはやわらかいし、土地はりんごに適しているし、良かった。

Uターン率を15%上げるということだが、Iターン者の人数が入っているだろうか。人数に入れても良いのではないか。移住者は、地域の事が分からない状態で移住してくるので、移住者への支援を施策に反映してほしい。

佐々木委員)

○高橋委員の話を聞いて、IUターン者に限らず誰にとっても情報を得やすということが重要だと分かる。ネットがあるし、データベースを作って、困った時には誰かからサポートしてもらえるようになると良いと思う。

辻委員)

○高校生と「高校出たらどうするの」という話しをすると、3人の内、3人とも都会に出たいと言っている。「長野県から出で暮らしたい」、「一度は都会に出たい」、という若者の気持ちがあると思う。「暮らしやすい」とか、「働き口はある」とか、私たちが考えることと、若者の意識とのギャップがあるのではないか。1回社会に出て、冷静な目で見るとレベルが高い町だと思うだろうが、若者から見るとそうではない。その上で、一度都会に出てから帰って来た人の中には、「寂しかったから帰ってきた」と言う人が多い。「地元に戻ってきたら友達がいっぱい」「やっぱり地元だな」、と思えることが、Uターン15%上昇のためには一番大事だと思う。高校生活が如何に充実しているかで、「地元って良いな」という考えがインプットされ、就職しても帰ってく

ることにつながるのだと思う。

東委員)

○自分が、定住しようと思った理由は、介護関係の仕事の都合で、妻と時間が重ならず、子育てもあまりできない中で、行政の保健師や地域の子育てサークルといった支援があって、妻の精神状態が保たれた。そういった点で子育てがしやすい町だと思ったから住み続けようと思った。

人口が少ないからこそその魅力もあり、そういう点でも自分は箕輪町が良いなと思った。自分は住んでみて初めて魅力がわかったが、良い情報はもっと出していけば魅力的な町になると思う。また、仕事柄、高齢者が増える中で、介護サービスの市町村格差があり、高齢者が出ていかないかも心配。

馬場委員)

○人口減少は避けられないとしても、どう考えていったら良いのか議論しなくてはと思う。人口バランスもある。人口減少というものに対する見方も色々あるということを考えなくてはいけない。

原委員)

○自分は東京で10年間働いてから、しゅしゅUターンしてきた経験があるが、戻ってきて良かったなと思ったのは3年くらい経ってからだった。働くことも含めて住みやすさは都会と比べて良く、「いずれは帰って来たい」と考えている人は多いんだろうなと感じる。高校生、若者が都会に憧れを持つのは避けられないと思う。どうしても一度は外に出たいと思うだろうし、止めることはできない。ただ、戻ってこれる土壌づくりをしっかりと、「いつでも戻っておいでよ」「戻ってきたらこんなに良い暮らしができるよ」という環境づくりに重点を置いたらどうかと感じる。

UIターン率、出生率もあるが、人口減少をどうするかという観点だけで議論を進めていくとちょっと無理があるのでは。箕輪町という特性を生かして、何に絞っていけば良いのか考えるべき。「Uターンの推進」、「子どもを育てやすいまちづくり」、「お年寄りが暮らしやすいまちづくり」などを基本構想に織り込んでいけば良いのではないかなと思う。

内堀委員)

○高校を卒業し、愛知県内に進学し、就職活動は愛知県でも箕輪町でもした。その時は、県外にいと地元での就職活動はしにくいと思った。長野県の企業ガイダンスがあったが、もっと身近な箕輪町の企業のガイダンスがあると良かったと思った。

就職後、最初数年間はいつか愛知県に戻りたいと思っていたが、消防団に入ったりす

る中で、小さい町だからこそ、私のような普通の人の意見を聞いてくれるという良い点に気付いた。遊ぶところは確かに少ないが、一人ひとりの声が皆に届いたり、アットホームなところが箕輪町の良いところだと感じる。そういったところをずっと維持していければ、おのずと人口減少が抑えられると思う。

小島委員)

○IU ターンの共通点は、住めば都。とりあえず住んでみたら良かったということ。I ターン組には情報が必要。U ターン組は学生時代の充実が必要。子どもは、一度町外に出ないと箕輪町の良さには気付かない。外で苦勞して箕輪町の良さに気付けば愛を持って帰ってくる。「やっぱり良かった」と住み続ける人が多いのは箕輪が良いということ。「I ターンU ターンにはアプローチが違う」「学生時代の充実が大切」「箕輪の良さを伝えていく」ことが大切。

子どもの中には、職場体験に行ったところに就職したいと言う声が多い。結局箕輪町は人の魅力もあるのだと思う。

浦野会長)

○一通り意見をいただいた。10年先の人口設定は非常に重いテーマであり、なかなか結論も出ない。スケジュールもあるので今日の議論の中身を各専門部会に持ち帰り、専門部会委員の意見ももらい、返してもらうことで進めてはどうか。

小池委員)

○様々な意見が出ているが、人口問題=税収だと思う。行政規模はどうするのか。税収との兼ね合い、このくらいの行政サービスを維持していくためには何が必要かという話をしなくてはいけない。

唐澤委員)

○提案だが、人口問題をそれぞれどうしたら良いと思うのか、委員それぞれでありたい姿をまとめるという宿題を出してはどうか。それぞれが思いを発表していたら議論が終わらない。

浦野会長)

○事務局でもんで、専門部会・次回の未来委員会に話をつなげていく。

町長)

○事務局の提案に補足。今回の試算の中で、現状の人口減少トレンドから見ると、すぐに人口を増やすことはできないと思う。どれだけ雇用の場を作っても、出生率を上げ

でも今すぐ人口を上昇させることはできない。右肩上がりの計画については慎重であったというのが事務局の考え。

一方で、大きく人口減少をさせてしまうと地域を壊してしまうということもあるため、現状を肯定するわけにもいかない。

今回の箕輪チャレンジは、消極的で弱めの提案。社会移動についても35歳までのUターンのみ加味しており、それ以外のIターンは考えていない。今までやっていなかった移住・交流対策をすればプラスになってくるだろうと思うので、その点についてはもう一度考えさせてもらいたい。

また、人口推計が先なのか、政策が先なのかという話は難しいが、提案の手法では、人口推計を先に考えて、それに応じてサービス需要を導き、施策を立てるという手法。本日の意見の中で、もっと施策を明らかにしてから積み上げるべきとの意見もあったので、この部分はもう一度考える。

浦野会長)

○専門部会でもこういった議論がされると思うし、予算がなければ実行もできない。予算との相談から施策が決まってくる。人口問題についても、本会の委員としてお話をいただき、進めていただきたい。

○続いて、暮らしやすさの定義、暮らしやすい町とはどういうことか。議論をお願いしたい。それがはっきりしてくると、町民の皆さんに箕輪町の暮らしやすさをきちんと打ち出せる。

辻委員)

○以前住んでいた岐阜県と比べると、箕輪町より、買い物の便利さや、遊ぶところの多さなどは良かった。ただ、箕輪町に来て価値観が違う事に気付いた。時間がゆっくり、競わない。箕輪町では、今あるものに沿って生きていくということが暮らしやすいということなのだと思う。コンビニができることで便利になることもあれば、そうでないこともある。物があれば幸せではない、今あるものを守っていただけでは幸せではない。難しいところだと思う。

高橋委員)

○箕輪町の暮らしやすさは、土地が安い、土地の区画が大きい、保育園の待機児童はないところ、土地（土）に力があって農業に適しているところだと思う。

一方、夜の託児がないので、あれば女性の仕事の幅が広がると思う。ショッピングできる場所、食材はそろいが、目で楽しめる場所があったら良いと思う。土の力の良さ、作って売ってと完結ができる農業の良さを、高校生に就職の選択肢として伝え

られたら良い。

柴委員)

○バイトや職場体験学習など、人とのつながりの中で魅力を感じるのだと思う。温かく迎えてもらえる、経験したことは心に残る。子どもたちに、大人の働く姿を見せていく場を見せていくことは大切。

馬場委員)

○第4次振興計画でも協働、町民参画という基本的な考えが示されていたが、町民としてほとんど意識がない。財政的には限度があれば、町民一人ひとりがそれぞれの役割を果たすという事を何らかの形で発信していかないと、町の発展はない。せつかく第5次振興計画を作るのであれば、町民一人ひとりが、何らかの目当て、生活の目標を持てるようにしていきたい。例えば、医療費等についても、日ごろから健康に意識することが町の支えになるということなど、何かそういうものが生まれてくると良いなと思う。つまり基本構想案の「みんなでつくる」には基本的には賛成だが、この具体を如何に表記するかがしっかり練られないといけないと思う。

「未来につなぐ」という文言については、若者の声を、身近な地域の問題につないでいくことが、具体につながると思う。選挙年齢が18歳に引き下がることは良いチャンスだと思う。若い人たちの力が、まちづくりの大きな力になると感じる。そんな議論もして欲しい。

和田委員)

○暮らしやすさ、ということが大事だと再確認した。人が住み始めるには、その地域が良いとわかってもらえなければいけない。情報発信が大切。また、住み続けるには暮らしやすさが大切。暮らしやすいと思っている人は、満足感を持って住んでいる人が多いのではないかと思う。地域の人に暮らしやすさについて挙げてもらうことも良いが、暮らしにくいと思って外へ出ていった人、マイナスの評価についても多面的の評価することで、外から見て箕輪町がどうなのか、わかると思う。満足の中からは、暮らしやすさを高めるものがありきたりのものしか出てこないのでは。

吉村委員)

○箕輪町が魅力があるのに、発信力が足りないとつくづく感じている。箕輪町は南信では飯田市に次ぐ製造品出荷額を誇るものづくりの町。もっと表に出したいと感じた。また、長野県の女性は、一度都会に出ると9割が戻ってこないというデータがある。女性を引き留める、また帰ってきてもらうために何が必要か考えることが大切だと思う。

原委員)

○情報を発信する側と受け取る側の食い違いがないようにしなければいけない。例えば「暮らしやすい」というひとつの言葉だけでは、人それぞれ受け取り方が違う。利便性を求める人、子どもの育てやすさを求める人とかいる。利便性だけでいくと都会には敵わない。そうでない暮らしやすさ。肉体的にも、精神的にも健康的でいられる暮らしやすさとかあるのではないか。田舎の魅力のひとつ。都会では、となりの人すらわからない。孤独感等精神的に不健康だった。それに比べれば箕輪町の方が勝っている。そういうことを議論の中心に置いて欲しい。

小島委員)

○専門部会に行った時に、予算のことを考えながらというが、それを言い出すと一般人はしゃべれない。自由な意見を出してもらって、事務局で精査するようにして欲しい。

町長)

○整理はできなかったが基本構想についての論点がしっかり出してもらえた。まちづくり地区懇談会を通じて、町民で議論を行う素地はできた。未来委員会に対する期待感と、早くしろという声もいただいている。あせることはないと思うが、スケジュールもある。町で素案を出して承認という形は避けたいと思っている。出てきた意見を何とかまとめてみるというようにやってみようと思っている。

5. その他

【次回内容】

※次回本会の内容は、本日の意見を踏まえた基本構想案についての議論と、商工会との意見交換があるが、どのようにするかは、正副会長と事務局とで相談して決定する

※人口について、意見ある方は、一週間以内にいただきたい。

※今回の資料については、専門部会にも出していく。

【次回日程】

次回開催 7月16日(木) 13:00～

※商工会との意見交換会をする場合、先方の都合で日程が前後する場合もある。

※8月に中間報告をすることを踏まえると、7月に2回開催することや、1回の開催時間を3時間にする場合もある。

6. 閉会